

別添 4 - 5

介護福祉士養成における看取り介護教育の課題

－大学での授業実践から－

分担研究報告書

厚生労働科学研究費補助金(障害者政策総合研究事業)

障害者支援施設や共同生活援助事業所等における高齢障害者への看取り

マニュアルの実装に向けた研究(25GC1013)

分担研究報告書

介護福祉士養成における看取り介護教育の課題—大学での授業実践から—

分担研究者：出村 早苗 (文京学院大学)

研究要旨

介護福祉士養成課程カリキュラムでは、看取りに関連する授業が複数科目あり、必修科目として位置づけられている。各科目には想定される教育内容の例があり、指定教科書を基に授業が展開される。本稿では看取り介護関連必修科目「生活支援技術」を取り上げ、年代が若く死に触れた機会が少ない学生達を対象とした授業内容の一例と教材紹介、大学における看取り介護教育の実践から考察を行った。

授業実践から、看取り介護教育では段階的学びを意識した授業展開が望ましく、3つの段階として、①死生観の土台づくり、②イメージを持つ、③具体的な支援内容を学ぶ、ことがあげられた。各段階ごとに教具・教材を導入することが効果的であると考え。また、生と死に関する授業内容となることから、個々の背景により本科目の授業内容が辛いと感じる学生がいることを想定して授業準備を行う必要があること、具体的に授業で実践している配慮事項についてまとめた。

高齢障害者への看取り支援の重要性が増す中、今後の課題として、障害分野の看取りに関する教育内容の検討があげられる。そのためには、障害分野の看取りの現場で求められる支援を明らかにし、現場との接続性のある教育内容の検討が必要である。

A. 研究目的

介護福祉現場では日常生活支援の先に、その人の人生の終焉があることも多く、人の生から死までを支える介護が求められる。介護福祉士は生活の場での看取りにおいて、最期の時まで本人が望む生き方を支えることになる。最期の時までの生き方を支えるためには、本人の思いや願いを理解し、寄り添う姿勢が必要となるだけでなく、看取りに対する幅広い知識が求められる。危篤時や臨終期における身体機能の変化に対する知識、死に臨む本人が感じるさまざまな苦痛を緩和するための介護方法、家族に対する支援、死後の介護、死別の悲しみに対するグリーフケアなどの知識を持ち、看取りに携わることになる。そのため、介護福祉士養成課程カリキュラムでも、看取り介護教

育が必修科目として位置づけられており、養成ルートで資格取得を目指す学生は事前に看取りに必要な知識を学ぶ体制がある。

本稿は、看取り介護の授業を担当する教員として取り組んできた授業実践から、若い年代の学生に看取り介護教育を行う上での課題を探る。看取りに携わる専門職を育てるために必要となる教育内容について検討し、学生にどのように伝えていくことが望ましいのか、大学での看取り介護教育の実践から考察する。

B. 研究方法

介護福祉士養成課程の必修科目として位置づけられている科目のうち、看取り介護に関する科目について整理し、そのうちの1科目「生活支援技

術」での授業内容を取り上げ、授業における配慮事項、教具・教材の使用目的等から、今後の介護福祉士養成課程における看取り介護教育の課題を明らかにする。

C. 研究結果

(1)介護福祉士養成課程での看取り介護教育内容
 介護福祉士資格取得ルートは、「養成施設ルート」、「実務経験ルート」、「福祉系高校ルート」、「経済連携協定(EPA)ルート」の4つに分かれており、本学は「養成施設ルート」の中の「介護福祉士養成施設(2年以上)」に該当する。カリキュラム総時間は1850時間となり、必修科目を修めた後に国家試験受験資格を得て、国家試験受験、合格後に介護福祉士資格を取得する流れとなる。

介護福祉士のカリキュラムは、4つの領域、15の教育内容に分けられている。各領域の目的・教育内容・教育内容のねらい・教育に含むべき事項・

留意点・想定される教育内容の例が示されており、この教育内容例に沿って授業が展開される。表1は、介護福祉士養成課程のカリキュラムで示されている領域と教育内容一覧である。太字に下線とした5つが看取り介護に関する教育内容があり、「想定される教育内容の例」に看取り介護教育に関する記載がある。

看取りに関する教育内容は複数の必修科目(科目名「生活支援技術」、「こころとからだのしくみ」、「認知症の理解」、「介護の基本」、「人間の尊厳と自立」)として位置づけられているが、そのうち、「想定される教育内容の例」に看取りに関する詳細が記載されている教育内容は、「生活支援技術」と「こころとからだのしくみ」となる。介護福祉士養成課程のカリキュラムの中では、主にこの2科目において看取りに関して詳しく学ぶ体制となる。

表1. 介護福祉士養成課程の領域・教育内容一覧

領域(4つの領域に分かれる)	教育内容(15の教育内容に分かれる)
人間と社会	<u>人間の尊厳と自立</u> 人間関係とコミュニケーション 社会の理解 人間と社会に関する選択科目
介護	<u>介護の基本</u> コミュニケーション技術 <u>生活支援技術</u> 介護過程 介護総合演習 介護実習
こころとからだのしくみ	<u>こころとからだのしくみ</u> 発達と老化の理解 <u>認知症の理解</u> 障害の理解
医療的ケア	医療的ケア

「介護福祉士の教育内容の見直しを踏まえた教授方法等に関する調査研究事業報告書『介護福祉士養成課程新カリキュラム教育方法の手引き』(2019) 公益社団法人日本介護福祉士養成施設協会 を基に作成

本稿では、科目名「生活支援技術」での看取り

介護教育を取り上げる。表2は、必修科目「生活

支援技術」の「人生の最終段階における介護」で想定される教育内容の例となる。各科目ごとに教育に含むべき事項や想定される教育内容の例があり、授業は基本はこの内容で進められる。また介

護福祉士養成課程の想定される教育内容の例に沿った指定教科書を使用した授業展開となる。今回取り上げる「生活支援技術」では、指導教科書以外の文献、視聴覚教材等を併用している。

表2 必修科目「生活支援技術」看取り介護で想定される教育内容の例

領域	科目	教育に含むべき事項	想定される教育内容の例
介護	生活支援技術	人生の最終段階における介護	1) 人生の最終段階とは ・人生の最終段階の社会/文化的/心理的/身体的意義と目的 ・死の準備教育 2) 人生の最終段階にある介護の視点 ・尊厳の保持 ・生きることを支える介護 ・意思決定支援(ACP アドバンス・ケア・プランニング) 3) 人生の最終段階を支えるための基本となる知識と技術 ・終末期の経過に沿った生活支援 ・心理的支援、環境の調整 ・安楽の技法 ・急変時と対応 ・臨終時のケア・死後のケア 4) 家族・介護職が「死」を受け止める過程 ・グリーフケア・デスカンファレンス

「介護福祉士の教育内容の見直しを踏まえた教授方法等に関する調査研究事業報告書『介護福祉士養成課程新カリキュラム教育方法の手引き』(2019) 公益社団法人日本介護福祉士養成施設協会 を基に作成

なお、科目「こころとからだのしくみ」における看取りケアで想定される教育内容の例は、表3の通りである。科目「生活支援技術」の想定され

る教育内容の例と重なる項目も多いが、科目「生活支援技術」では、介護福祉の現場で必要となる看取りに関する生活支援技術について学ぶことになる。

表3 必修科目「こころとからだのしくみ」看取り介護で想定される教育内容の例

領域	教育内容	教育に含むべき事項	想定される教育内容の例
こころとからだ	こころとからだ	人生の最終段階のケアに関連したこころとからだのしくみ	1) 人生の最終段階に関する「死」のとらえ方 ・死のとらえ方・生物学的な死・法律的な死・臨床的な死・尊厳死・安楽死 ・リビングウイル ・意思決定支援(ACP アドバンス・ケア・プランニング) 2) 「死」に対するこころの理解

だ の し く み	だ の し く み		<ul style="list-style-type: none"> ・「死」に対する恐怖・不安・「死」を受容する段階 ・家族の「死」を受容する段階 3) 終末期から危篤状態、死後のからだの理解 <ul style="list-style-type: none"> ・終末期から危篤時の身体機能の低下の特徴(終末期の特徴、危篤時の変化(死の三徴候など)・死後の身体変化) 4) 終末期における医療職との連携 <ul style="list-style-type: none"> ・終末期から危篤時に行われる医療の実際(呼吸困難時、疼痛緩和など) ・終末期から危篤時、臨終期の観察のポイント ・介護の役割と医療との連携・その他(死亡診断書・死後の処置など)
-----------------------	-----------------------	--	---

「介護福祉士の教育内容の見直しを踏まえた教授方法等に関する調査研究事業報告書『介護福祉士養成課程新カリキュラム教育方法の手引き』(2019) 公益社団法人日本介護福祉士養成施設協会 を基に作成

障害分野の必修科目として位置づけられる「障害の理解」における「想定される教育内容の例」が表4となる。看取りに関する想定される教育内容の例は記載がないが、指導教科書を確認すると、「想定される教育内容の例」の中の「ライフステージの特性と障害の影響」、「ライフステージごと

の支援方法」に該当する箇所で見取りに関する記述がある。表5は本学で使用している教科書から、関連する該当箇所を抜粋したものである。障害分野での看取りについては記載箇所が少ない状況であるといえる。

表4 必修科目「障害の理解」看取り介護で想定される教育内容の例

領域	教育内容	教育に含むべき事項	留意点	想定される教育内容の例
こ こ ろ と か ら だ の し く み	こ こ ろ と か ら だ の し く み	③障害のある人の生活と障害の特性に応じた支援	障害のある人のライフステージや障害の特性を踏まえ、機能の変化が生活に及ぼす影響を理解し、QOLを高める支援につながる内容とする	2) 生活と障害 <ul style="list-style-type: none"> ・ライフステージの特性と障害の影響 ・ライフステージごとの支援方法 ・サービスの種類とサービスを受ける方法

「介護福祉士の教育内容の見直しを踏まえた教授方法等に関する調査研究事業報告書『介護福祉士養成課程新カリキュラム教育方法の手引き』(2019) 公益社団法人日本介護福祉士養成施設協会 を基に作成

表5 必修科目「障害の理解」指導教科書での看取り介護記載箇所

教育内容「障害の理解」指導教科書「知的障害」に関する記載一部抜粋

(4)高齡期

高齡期は、青年期・壮年期よりもさらにたくさんの支援を受けながら生活する場合があります。支援の量が増えても、「1人の人」として人生の課題に取り組むことが重要で、尊厳を大切にしながら支援することが大切になります。

1. 知的障害のある人にとって大切なこと

- ・日常生活や社会生活において、できていたことができなくなっていくことや、心身機能が衰えていくことに対応する
- ・新たにあらわれた病気に対応する
- ・心身機能や生活状況に応じたサービスを利用し、適応する
- ・身近な人を含めた死に対応する

2. 家族や支援者にとって大切なこと

知的障害のある人の高齡期に、周囲の人が留意しなければいけない点があります。障害のある人に老いの自覚がない場合には特に気をつけて、尊厳をそこなわないように関わっていく必要があります。

留意点の1つ目は、障害のない人よりも老化が早い場合があることです。老化が始まっても、知的障害のある人自身に自覚がない場合もあります。いままでできていたことができなくなってきたことに気づいたら、認知症や精神疾患(うつ病等)の可能性を考え、早期に受診してもらえよう、話し合しましょう。

2つ目は、病気への注意です。知的障害のある人の死因の多くが、障害のない人のものとは異なっているということが指摘されています。知的障害が軽度の場合でも、複雑な因果関係の理解は難しいため、心身の不調(結果)が、見た目ではわからないからだの内部の変調によるもの(原因)とは自覚することができず、心身の状態を適切に訴えられずに、受診が遅れてしまう場合もあります。定期的に受診できるよう、環境を整えていくことが重要です。

引用文献「最新介護福祉士養成講座 14 障害の理解」介護福祉士養成講座編集委員会/編 中央法規出版(2022) p170

(2)科目「生活支援技術」看取り介護の授業における配慮事項

本学受講対象学生の年齢は、十代後半から二十代前半となり、身近な人の死を経験していない学生が多い。死に触れた機会がない学生にとり、教科書にある看取り介護の具体的な知識から授業が入ると、看取りのイメージが持てないまま、死に関わるのが怖いという記憶だけで授業が終わる可能性もある。また受講後、看取りに関して、抵抗がある、苦手意識があるという記憶だけが残る場合、介護福祉現場で実際の看取りを経験した際にはさらに大きなとまどいとなることも予測される。そのため、看取りに関する授業を受けるにあたり、死に対する過度の不安や恐怖を感じたり、

授業内容に抵抗がある学生がいるかもしれないことを想定した授業体制を検討している。看取り介護に関する科目は必修科目となり、介護福祉士を目指す学生に受講しないという選択肢はない。生と死に関して考えざるを得ない授業内容となることから、他科目よりも配慮が必要な科目であると考えている。

まず本科目では段階的な学びを特に意識して、授業を構成している。十代後半から二十代前半の学生への看取り介護教育では、具体的授業内容に入る前の準備段階が必要となると考えている。この段階的な学びについては、介護福祉現場における職員への看取り介護教育・研修等でも同様となることが予測される。

表6は、看取り介護教育における3つの段階となる。第1に、死について考える機会をつくる。死に触れた機会がない学生にとり、死について考えてみることから始まり、やがて自らも親しい人との死別があるかもしれないこと、そして自らが死を迎える時にどのような生き方を望むのか等、自分自身の死生観の土台づくりに繋がればよいと考える。第2に、視聴覚教材を使用、または介護福祉実習を通じた経験から、生きることや死ぬこと、看取りに関してイメージを持つことである。教科書の文字だけを捉えるのではなく、看取りの

現場を体感することが必要となると考えている。ここでは、特に生活の場における看取りが体感できる教材を選択している。第3の段階として、看取り介護に関する具体的知識、技術を学んでいく段階となる。この第3の段階が介護福祉士養成課程テキストに記載されている内容となり、ここで必要な知識を身につける。第1、第2の段階は、死への準備教育に該当する。この準備教育を経て、第3の段階に移行することが望ましいのではないかと考える。

表6 看取り介護教育における3つの段階

①死生観の土台づくり 死について考える機会をつくる	②イメージを持つ DVD視聴または実習現場での経験	③必要な知識を身につける 看取りケアについて具体的に学ぶ
------------------------------	------------------------------	---------------------------------

次に看取り介護に関する授業開始前のアンケートを実施している。親しい者との死別を経験していない学生が多い一方で、既に死別経験をしている学生も一定数おり、該当学生が当時を想起するような授業内容もある。アンケートの目的は、身近な人の死を経験後、日が浅い学生や、人の死に関して向き合うことが辛いと感じる学生がいるか

もしれないことを想定し、事前に学生の状況把握をするためである。

表7は、実際に授業にて使用しているアンケート用紙の文面となる。看取り介護の授業に入る前に試験を実施するため、試験用紙の中にアンケートを組み込んでいる。他者の目を気にする学生もいることから、学生同士で記載をしたことがわからないようにするため、試験時間を使用している。

表7 科目「生活支援技術」看取り介護の授業開始前のアンケート用紙文面

<p>以下、採点対象外です。生活支援技術E、前半の「入浴・清潔保持の介護」については本日で終了します。後半は「看取り介護」について学ぶ予定です。</p> <p>後半の授業は、生きることや死ぬことに関して考える機会が多い授業内容となります。必修授業であるため、皆さんが授業の選択をできませんが、この授業を受けるにあたりどうしても向き合うことがつらい、演習等に関して不安があるという学生さんがいらしたら、事前に教えてください。</p> <p>授業にて特別な配慮(授業の欠席など)ができるわけではありませんが、皆さんの状況の把握をするために毎年お聞きしています。詳しい事情まで記載する必要はありません。答えられる範囲で構いません。特にない場合には、何も記載する必要はありません(前半の授業の感想などがあれば、自由に記載してください)。</p>
--

用紙に記載をする学生の中には、授業を受けることが辛いと予測される背景がある学生もいる。

該当学生がいる年度は授業後の様子、DVD視聴後の様子を特に気にかけるようにしている。直接授業後に声をかける場合もあるが、見守る形が多い。

これまで授業内容に向き合える状況にない学生への個別の対応をしたこともある。状況から授業に向き合えないのは当然と思われる背景があり、本人の希望があり個別面談を行い対応をしている。この対応では、学生が不安を感じている授業回に該当する日程を伝えて欠席を認めている。単位に影響する状況は生じず、個別に授業回の資料配布を行う対応を行った。これらの対応は、本学の特色として少人数教育でいつもと違う学生の様子を教員が把握しやすい環境、フォローしやすい体制が学内にあるため可能となっているが、学生数によっては把握が難しくなるかもしれない。また表7にある通り、アンケートに事情を記載したことで出席状況に関して特別な配慮ができるわけではないため、この学生に関しても、欠席授業回を出席として扱うなどの対応は行っていない。ただ授業担当教員が本人の背景を把握していることは、授業内容に不安や辛さを感じている受講学生にとっては安心感につながる可能性は高いのではないかと考えている。

他、看取りのドキュメンタリーを視聴前には、生きていた方が亡くなる場面があること、看取り期の呼吸の変化やお別れの場面があること、ご遺体となられてからのご本人が映し出された映像があることを伝え、見るのが辛い場面がある学生

は見ないという選択も認める説明をしてからの視聴としている。細かく事前に映像内容を提示することで、学生が心の準備ができる時間を設けている。

本科目では配慮をした上で、介護福祉士は人の人生の最期まで深く関わることのできる専門職であること、だからこそ事前に生と死について考え、看取りに関する教育を受ける必要があることを伝えている。

(3)看取り介護教育内容と使用教具・教材

科目「生活支援技術」の看取り介護に関する授業は、90分×15回(2025年度)の授業となる。基本は介護福祉士養成課程の教科書があり、必要な知識を身につけることに関しては教科書を基本に授業を展開するが、前述した通り3つの段階を意識した授業構成となる。授業にてこれまで使用してきた教具・教材が表8となる。授業回数が決められており、その中で必要な知識を身につける必要がある。そのため、視聴覚教材に関しては、年度により変更することもあり、すべての教材を同年度に使用しているわけではない。また文献は、学生に文献の中の1つのエピソードを紹介、一部抜粋などの使用方法となる。

表8 科目「生活支援技術」介護福祉士養成課程教科書以外の教具・教材一覧

NO	種類	タイトル	著者/出版社/出版年	使用段階
1	文献	「死にカタログ」	寄藤文平/大和書房/2005年	①死生観の土台づくり
2	文献	「デス・エデュケーション展開ノート」	吉田晴彦/清水書院/2010年	①死生観の土台づくり
3	文献	「日野原重明の世界 人生を色鮮やかに生きるための105の言葉」	新老人の会編集協力/中央法規出版/2017年	①死生観の土台づくり
4	文献	「死とどう向き合うか」	アルフォンス・デーケン/日本放送出版協会/1996年	①死生観の土台づくり
5	ボードゲーム	「エンディングゲーム」	omniheal/2024年	①死生観の土台づくり

6	DVD	「十歳のきみへ いのちの授業」	日野原重明/公益財団法人 笹川保健財団/2007年	①死生観の土台づくり
7	DVD	「memento.mori 秋田 2007 『死』 を見つめ、『今』を生きる」	公益財団法人笹川保健財団 /2007年	①死生観の土台づくり
8	DVD	「memento.mori 鳥取 2008 『死』 を見つめ、『今』を生きる」	公益財団法人笹川保健財団 /2008年	①死生観の土台づくり
9	DVD	「ホスピス緩和ケアの歩み～日 本財団ホスピス研究会活動報 告～」	公益財団法人笹川保健財団 /2008年	①死生観の土台づくり
10	絵本	「悲しみのゴリラ」	ジャッキー・アズーア・ク レイマー他/クレヨンハウ ス/2020年	①死生観の土台づくり ※授業後半グリーンケアの 授業回で回覧
11	絵本	「けんちゃんのもみの木」	美谷島邦子・文、いせひで こ・絵/BL出版/2020年	①死生観の土台づくり ※授業後半グリーンケアの 授業回で回覧
12	文献	「死を看取る医学 ホスピスの 現場から」	柏木哲夫/日本放送出版協 会/1997年	②イメージを持つ
13	文献	「墜落現場 遺された人たち」	飯塚訓/講談社/2001年	②イメージを持つ
14	DVD	「高齢者とともに生きる『“最 後”までの日々』より」	NHK エンタープライズ/実教 出版株式会社/ 2007年	②イメージを持つ
15	DVD	「老衰死 穏やかな最期を迎え るには」	NHK スペシャル/NHK/2015年	②イメージを持つ
16	<u>DVD</u>	「在宅ホスピス医・川越厚」	プロフェッショナル仕事の 流儀/NHK/2014年	②イメージを持つ
17	DVD	「家で親を看取る その時 あ なたは」	NHK スペシャル/NHK/2013年	②イメージを持つ
18	DVD	「『在宅看取りとグリーンケア』 患者が退院したその後に映画 『ずっと、いっしょ。』より」	豪田トモ/2017年	②イメージを持つ
19	用品	「エンゼルデンチャー」	ワックス製尊体用義歯 /SOKEI	②イメージを持つ ※授業後半「死後の介護」 の授業回で紹介
20	用品	「チンカラー」	頸部装着閉口具/株式会社 チンカラー	②イメージを持つ ※授業後半「死後の介護」 の授業回で紹介
21	用品	「エンゼルケアセット」	顔あて(白布)・合掌バン ド・エンゼルメイク用品等	②イメージを持つ ※授業後半「死後の介護」 の授業回で紹介
22	DVD	「高齢者ケア施設での重度化対 応ケア&看取りケアマニユア	さくばらホーム・シルバー チャンネル/日総研出版	②イメージを持つ ※授業後半「グリーンケア」

		ル」(デスカンファレンス)	/2011年	の授業回で視聴
23	DVD	「グリーフケア 第3巻 様々なグリーフを抱えて その1」	上智大学グリーフケア研究所/新宿スタジオ/2014年	②イメージを持つ ※授業後半「グリーフケア」の授業回で視聴
24	文献	「『死にゆく人へのケア』高齢者介護福祉施設での看取りケア指導テキスト」	櫻井紀子監修/筒井書房/2009年	③必要な知識を身につける
25	文献	「高校教科書 生活支援技術」	川井太加子監修/実教出版/2023年	③必要な知識を身につける
26	文献	「ケアとしての死化粧 エンゼルメイク研究会からの提案」	小林光恵/日本看護協会出版会/2004年	③必要な知識を身につける
27	文献	「遺体管理の知識と技術 エンゼルケアからグリーフケアまで」	伊藤茂編/中央法規出版/2013年	③必要な知識を身につける
28	文献	「グリーフケア 死別による悲嘆の援助」	高橋聡美/メヂカルフレンド社/2012年	③必要な知識を身につける
29	パンフレット	「これからの過ごし方について」	厚生労働科学研究費補助金第3次がん総合戦略研究事業「緩和ケア普及のための地域プロジェクト」/OPTIM	③必要な知識を身につける
30	DVD	「実践！看護技術シリーズ 終末期とその後の看護技術編 VOL.2 死後のケア」	長谷部佳子監修/医学映像教育センター/2009年	②必要な知識を身につける

死生観の土台づくり(N01~11)、イメージを持つ(N012~23)、必要な知識を身につける(N024~30)、3つの段階にわけて使用をしている。段階にわけて、いくつかの教材使用方法を紹介する。

①「死生観の土台づくり」

N01.の「死にカタログ」は、死についてイラストで考えた本になる。本の帯には「あなたにとって、いちばん未来の話じゃないか」と記載があり、この言葉も学生に紹介をする。資料を基に作成されており、エリザベス・キューブラー・ロスの「死ぬ瞬間ー死とその過程について」からは死の受容過程がイラストで表現されている。教科書でも死の受容過程について学ぶため、イラストで確認をした後に、教科書の該当箇所ですべて具体的な知識を身につける形となる。他にも死因によって死の手前の様子が違うことなどが記載されており、代表的な死因や死への態度などがイラストにされている。

学生が「自分だったら」という視点で考えてみる導入回で毎年使用している。

N06.の「十歳のきみへ いのちの授業」は、日本の終末期医療・ホスピスケアの確立に尽力をした日野原重明氏が小学生にいのちの大切さを伝える授業が収録されたDVDである。「いのちは君たちの持つ時間」との言葉から、学生自身が自らのいのちをどのように使うか、介護福祉の現場で利用者のいのちとどのように向き合うかを考えるために導入回で毎年使用している。

N011.の「けんちゃんのもみの木」は、日航機墜落事故で次男健さんを亡くされた美谷島邦子氏が文章を書かれた絵本である。人を愛する気持ちや

愛する人を喪った深い悲しみ、その後の生き方について考えることのできる絵本となる。授業時に読み聞かせをするのではなく、グリーフケアの授業回に回覧という形をとっている。

②「イメージを持つ」

N012.の「死を看取る医学 ホスピスの現場から」は、1970年代に日本で初めてのホスピスプログラムを開始し、2500名の方を看取ったホスピス医である柏木哲夫氏が、ホスピスの現場での患者とのやりとりについてまとめた本となる。看取りの場でユーモアが大切であることが記載されており、実際のやりとりのいくつかを抜粋して紹介をしている。看取りの場でのユーモアについては、死への準備教育を提唱したアルフォンス・デーケン氏の言葉も併せて授業で紹介をして、なぜ看取りの現場でユーモアが必要と言われているのか、愛と思いやりの現実的な表現としてのユーモアの重要性を学生が考える機会をつくる。また若い学生達に死は他人事ではないことを考えてもらうため、柏木哲夫氏の「死を背負って生きる」という言葉を紹介している。「生きることの延長線上に死がある」との言葉はよく使用されるが、生を享けた時から死を背負って生きているという言葉を紹介し、学生自身に考えてもらう形である。また「支える」と「寄り添う」の言葉の違いについて、柏木哲夫氏の別の文献を一部抜粋する形で学生達に伝えている。

N015.の「老衰死 穏やかな最期を迎えるには」は、特別養護老人ホームでの看取りのドキュメンタリーである。老衰死は2018年から日本の死因ランキング第3位であり、介護福祉の現場にでた学生達が看取りに関わる際、利用者の死因となる可能性が高いと予測している。DVDの中では、老衰死に関する研究も紹介されており、データがわかりやすく解説されている点と、具体的な介護福祉現場の看取りの実際がいくつかの事例で紹介されている点に着目して視聴をする。事前に学生に特に着目してほしいポイントを伝えた上で視聴をする形となる。視聴後、実際に具体的な知識を教科書で学ぶため、食事が摂取できなくなる過程、呼吸の変化、看取る家族の葛藤などを中心にポイント

を伝えている。

N019~21.は、エンゼルケアに関する用品の紹介となる。介護福祉現場でこれらの用品が使用される頻度は低いかもしれないが、エンゼルケア用品があることを知る、触れてみることでイメージを持つことを目的としている。

③必要な知識を身につける

N024.『『死にゆく人へのケア』高齢者介護福祉施設での看取りケア指導テキスト』は看取り介護実践の先駆的施設となる特別養護老人ホームで作成されたテキストとなる。危篤時のケア技術、臨終・死亡時のケア技術について記載されている箇所を抜粋して使用している。危篤時のケアでは、身体の変化があった際に具体的に介護福祉士が行うことのできる「心地よいと感じられるケア」が記載されているため、学生が現場に出た時に何ができのかが理解がしやすいと考えている。また死前喘鳴が見られた時の家族の心情なども紹介をされているため、家族支援を行うことになることも学生がイメージをしやすい。絶版となるため、該当箇所を印刷をして配布する形で毎年使用している。

N029.「これからの過ごし方について」は、死が近い時にみられる症状、その時家族にできることが記載されたパンフレットである。専門用語を使用することなく、誰もが理解できる言葉を使用している点から、将来学生が家族への支援を行う場面などでも活用ができると考え、紹介をしている。

D. 考察

授業実践の中から、授業での配慮事項、段階的な教育、教具・教材の使用方法について取り上げた。現段階での実践内容となるが、今後学生の状況に合わせて検討を続けていく必要があると考えている。さらに、介護福祉現場で求められる看取り介護と介護福祉士養成を行う大学で実践される授業内容に接続性があるのか、検証が必要といえる。

また介護福祉士養成課程の必修科目の中で、障害関連科目で想定される教育内容の例に障害分野の看取りの詳細は記載されておらず、障害関連科

目の教科書でも看取りに関する記述は少ない状況がある。今後、障害分野で高齢障害者の看取りが増加することが予測されていることから、介護福祉士養成教育においても、障害分野の看取りの詳細を学べる体制の構築が課題といえる。

授業実践を紹介した科目「生活支援技術」も、「人生の最終段階の介護」としての基礎知識を学ぶため、障害分野の看取りの詳細について、想定される教育内容の例で触れられていない。

本学では介護福祉士資格取得後、多くの学生達が介護福祉の現場に就職をする。これまでも介護福祉現場で活躍する人材育成を念頭に授業を行ってきたが、看取りの現場と考えた際に高齢分野で、主に老衰で亡くなる方をイメージした授業を行ってきた。表8からも、これまで障害分野での看取りをイメージできる教材を使用していないことがわかる。

今後の課題として、障害分野の看取りをイメージできる教材を検討していくことがあげられる。介護福祉士を目指す学生が障害分野での看取りに関して知る機会、イメージができる授業を検討していきたい。そのためにはまず、障害分野での看取りの特性を教員が学び、現場で求められる支援を理解した上で教材を選び、学生に伝えていく必要がある。

E. 結論

本稿は介護福祉士養成課程必修科目の中の看取りに関する教育内容を整理し、その中の1科目を取り上げた授業実践の一例となる。紹介した3つの段階は担当教員としての授業実践から考えてきたことであり、看取り介護教育において普遍化されたものではない。ただこのような段階を踏むことで、看取りに関して関心を持つことのできる学生がいるかもしれないと考えている。

また生活の場における看取りでは、看取り期になったから突然特別な介護が展開されるわけではない。看取り期に限らず、日々の介護をいかに大切に考えることができるかが重要となり、日常生活支援の中で1つ1つの介護を積み重ねた先に、看取り介護が展開されることを学生達に伝えてい

きたいと考えている。

介護福祉士が関わることになる看取り介護の現場は、「生活の場」となる。生活の場における看取りであることを意識し、日々の介護を最期まで本人と家族に寄り添い継続することができるために、事前教育で必要となることは何か、今後も検討をしていきたい。学生達が高齢分野・障害分野を問わずに看取り介護に携わることを想定して、介護福祉現場との接続性のある教育実践について考えていく必要性を感じている。

F. 文献

- 1) 「介護福祉士の教育内容の見直しを踏まえた教授方法等に関する調査研究事業報告書『介護福祉士養成課程新カリキュラム教育方法の手引き』」公益社団法人日本介護福祉士養成施設協会(2019)
- 2) 「最新介護福祉士養成講座 14 障害の理解」介護福祉士養成講座編集委員会/編
中央法規出版(2022)
- 3) 「最新介護福祉士養成講座 7 生活支援技術Ⅱ」介護福祉士養成講座編集委員会/編
中央法規出版(2022)

G. 研究発表

なし

H. 知的財産権の出願・登録状況

なし